

CLASSIC VICUS

2017 No.12

Vicus= ラテン語で地域、界隈の意

音楽ホール淘汰の時代 指定管理者制度や劇場法、改修予算不足などで厳しく

ジャーナリスト／元朝日新聞記者・元浜離宮朝日ホール支配人 **志村嘉一郎**

「今度できる音楽ホールの支配人をやってくれ」と社長に言われたのが、浜離宮朝日ホール開館3ヶ月前。オープニング公演のプログラムもなければ、ホール貸し出しの規則もない。社内から寄せ集めた人たちが徹夜で準備し、1992年10月1日の開館に間に合わせた。支配人にとってショックだったのは、それまで年間1億5千万円あった自主公演予算が10分の1の千5百万円に削られたこと。前任者が大判振る舞いで約束した高額な音楽公演を整理し、客が入って収支がゼロ以上になる公演を探すのに必死。しかも内容を落としたのでは朝日新聞の沽券にかかる。前任者時代に使い込み事件などもあり本社の経理部の目が厳しく、協賛金の工面に走り回る日々を送った。演歌と応援歌しか知らない経済記者がクラシックの世界に放り込まれ、2年後には50以上の自主公演でわずかばかりの黒字を計上することができた。「バブルで設計はじけて運営」と、業界の人たちから聞かれるたびに自嘲ぎみに答えたものだった。

バブルがはじけた90年代に開館が集中

このころ、国内ではホールが雨後の竹の子ごとく、次々と誕生した。1990年には東京芸術劇場・水戸芸術館・川口リリアホール・文京シビックホール、91年に府中の森芸術劇場・岡山シンフォニーホール、92年は王子ホール・浜離宮朝日ホール・葛飾シンフォニーホール・秋篠音楽堂・かながわアートホール・松本文化会館・愛知芸術劇場、93年鎌倉芸術館・よこすか芸術劇場・松戸森のホール21・旭川クリスタルホール・フィリアホール・北九州市響ホール・宮崎県立芸術劇場、94年さいたま芸術劇場・しらかわホール・ティアラこうとう・那須野が原ハーモニーホール・霧島国際音楽ホールなどが開館した。90年代後半になるとやや勢いがおちる。それでも95年に紀尾井ホール・京都コンサートホール、96年いずみホール・富山市芸術文化ホール、97年東京オペラシティ・東京国際フォーラム・すみだトリフォニーホール・札幌コンサートホール・ハーモニーホールふくい、98年横浜みなとみらいホール・びわ湖ホールなどが完成した。日本の音楽ホールの開館は1990年代に集中、2000年代になると少なくなった。

1980年代の日本経済は、株価や地価が高騰、好景気が続いた。が、1990年初頭から株価が暴落、翌年から地価の暴落も始まり日本経済は下降の一途をたどる。バブル経済時代に自治体や民間企業の金あまり現象がすすみ、「これからは芸術の時代」とばかりにクラシック音楽を市民に聴かせるホールの建設を計画したが完成まで年月がかかり、バブルがはじけたあとの開館となった。

21世紀になりお荷物に

バブルがはじけた「失われた10年」は、21世紀に入って「失われた20年」と続く。21世紀に入ると、企業や自治体は「ホールはお荷物」と感じるようになる。経営に敏感な大企業はいち早くホールの閉館やリストラに踏み切る。一方、親方日の丸の官僚が「予算が少くとも、なんとかホール運営を続けられないか」と考えついたのが、指定管理者制度だった。

2003年小泉内閣は「公営組織の法人化・民営化」を旗印に指定管理者制度を施行。公の施設の管理・運営を、株式会社など営利企業、財団法人、NPO法人、市民グループなどの団体にも代行させる制度をつくった。この制度は、ホールなどを持つ自治体にはまことに都合がいい。それまでの予算を大幅に減らして、指定管理者にホールの運営を請け負わせることができるのだ。バブルがはじけて税収が大幅に減った自治体には好都合な制度となった。

しかし、不十分な予算で請け負った企業や団体は人件費を減らさざるをえず、人員のほとんどを賃金の低い非正規従業員で運営せざるを得ない。都内のある自治体ホールでは、指定管理者である財団法人職員の給与は自治体職員の約8割、この法人が雇う派遣社員はさらにその7、8割で、派遣社員の収入は自治体職員の5割から6割と低い。さらに公演内容も落とさざるをえず、地方に行くとクラシックホールなのにクラシック公演はほとんどなく、市民カラオケ大会や2流3流の落語家による公演などでお茶を濁しているホールもあるほど。指定管理者は清掃業者などが落札し、音楽に無知な人がマネージメントをしているホールも出てきた。ホールのスタッフも次々と替わり、公演もその限り。

劇場法は指定管理者制度とバッティング

2012年にできた劇場法もホール運営のネックになってきた。劇場法は指定管理者制度ではほとんど実現ができるにない法律だからだ。指定管理者制度を盛り込んだのは総務省管轄の地方自治法、これに対し劇場法の管轄は文化庁。①自治体は、制作者、技術者、経営者、実演家など劇場や音楽堂の事業に必要な専門職員を養成し確保せよ②学校教育と連携、実演技術の鑑賞などをすすめよ③外国の多彩な実演芸術の鑑賞の機会を提供、音楽堂が行う国際交流を自治体は支援せよ、などが劇場法に盛り込まれている。自治体がホール運営の予算を急減させて清掃会社などに委託した場合、臨時職員や派遣社員で運営する音楽堂や劇場に専門技術者を取りそろえ、学校教育と連携、国際芸術交流を促進することなどできるのだろうか。

バブル末期やはじけた直後に完成したホールは、30年前後経たいま、設備にガタが来ている。壁に亀裂があり水しぶき出たり電気設備が動かなくなったり、さまざまな面で建物・設備の老朽化が進んでいる。中には手抜き工事と思われるような自治体のホールもあり、多くのホールで補修予算の獲得に苦心している。しかし、指定管理者が自治体の担当部署に改修予算を要求しても、満額はもらえず毎年少しづつ修理しているありさま。まして、大規模修繕や耐震不足で建てかえとなると予算措置をめぐって議

会の議論が沸騰、いっこうに進まない。

閉鎖や解体、休館のホールが続出

この中で7、8年前から閉鎖や解体、閉館するホールが全国的に出てきた。黒石市民文化会館は08年から休館中。市の財政難から人件費や維持費が出せなくなったのだ。我孫子市市民会館も07年に閉鎖・解体された。このほか、関東では古河市公会堂、常総市市民会館、筑西市民会館、栃木会館などが08年から16年の間に閉館や解体された。関西では1993年に開館したイシハラホールが、親会社・石原産業の経営悪化から2013年に閉館した。東大阪市立市民会館、茨木市市民会館、大阪府立青少年会館なども08年から15年の間に閉めた。東京でも津田ホールが大学の校舎建てかえにともない閉鎖、カザルスホールも大学に売却されたあと開いていない。青山劇場、ゆうぼうとも老朽化で閉館した。

すでにホールは淘汰の時代に入っている。自治体や企業にとってホールがいまやお荷物になりつつあるのだ。ホール経営は苦難の時代になり、そこで演奏するクラシック音楽関係者も冬の時代に入った。4兆円も5兆円もの莫大な予算を浪費するスポーツイベント・東京オリンピックの陰で、音楽芸術の世界は寂しく過ごさねばならないのだろうか。

公共ホールにとっての指定管理者制度の問題 その1

すみだトリフォニーホール

(公財) 墨田区文化振興財団 音楽事業係長 すみだトリフォニーホール チーフ・プロデューサー 上野喜浩

お金重視は制度の弊害

すみだトリフォニーホールは今年開館20周年を迎えます。東京の副都心・錦糸町・亀戸に東京東部地域を代表するコンサートホールとして1997年にオープンしました。また、日本初のフランチャイズ・オーケストラを持つホールとして、新日本フィルハーモニー交響楽団(以下「新日本フィル」)が定期公演等を行い、さらに地域での音楽コミュニティ活動を行っています。

1985年両国国技館の開館記念事業として行われた「国技館5,000人の第九」をきっかけに、88年墨田区は「音楽都市構想」を掲げ音楽都市づくりをスタート、墨田区(以下「区」と新日本フィルはフランチャイズ契約を結び、活動拠点としてのトリフォニーホールの建設が計画されました。翌89年から墨田区内の学校や福祉施設において、地域音楽コミュニティ活動をスタートしました。

トリフォニーホールの管理運営は区が設置した公益財団法人墨田区文化振興財団(以下「財団」)が行っています。

指定管理者制度導入については、2006年から各期5年間ずつの2期を終え、現在3期目の1年目となります。第

3期は初めて公募となりました。財団は設立の趣旨から、ホールの管理運営を行いながら、区の「文化芸術振興条例」と「文化芸術振興に関する基本指針」の実現に寄与し、フランチャイズ・オーケストラの新日本フィルと連携・協力し、区の「音楽都市づくり」の推進を行うことを使命としています。区と財団との指定管理に関する協定書には「フランチャイズ・オーケストラに関する業務」が明記され、具体的な内容として「フランチャイズ・オーケストラによる芸術文化の普及」との事業実施が指定されています。

ここまでみると、すみだトリフォニーホールは88年「区の音楽都市づくり」と89年の「区と新日本フィルのフランチャイズ契約」の明確な理念と目的に基づいていることがお分かりいただけると思います。指定管理者制度に関する、私たち財団にとっての今後の課題としては次の2点になります。

ひとつはフランチャイズ契約から約30年、ホール開館から20年と時間が経過することで、当時の関係者も少なくなるなか、理念と目的の感覚共有が希薄になりつつあ

すること。

もうひとつは予算について、管理運営費の削減や文化庁等の外部公的助成による事業費の確保等、さまざまな工夫で予算削減に努めてきたが、最終的には人件費部分で民間と競合すると圧倒的に不利と思われます。

私たちにとって指定管理者制度は、社会状況の変化に対応する柔軟性を持つために有効であり必ずしも否定するものではありません。しかしながら、理念や目的よりも、お金のことを重要視するようになれば、この制度の弊害と言えるかもしれません。

公共ホールにとっての指定管理者制度の問題その2 パルテノン多摩

(公財) 多摩市文化振興財団 音楽プロデューサー 梅津知美

民間に委ねてよいか文化行政

2003年に指定管理者制度が施行され、間もなく14年が過ぎようとしている。

幸いにも私が属する多摩市文化振興財団(パルテノン多摩)は、今までこの制度による存続危機に直面することはなかった。しかし、来年度築30年を迎える建物の老朽化で大規模改修を余儀なくされている。これがきっかけで財団の今後も安泰というわけにはゆかなくなってきたそうだ。

現在、多摩市は平成30年を目途に改修工事を実施すべく準備を進めているが、改修費用が80億円と見積もられたことなどから、市議会を巻き込んでの大問題になっている。

現在考えられている改修は、老朽化した部分の交換や補修に加えて、高齢化や障がい者などに対応したバリアフリー化、さらに変化しつつある昨今の公共ホールの役割を追加するなどの工夫、と盛りだくさんである。パルテノン多摩は正式には複合文化施設と称し、大小のホールのほかに博物館機能を持った展示スペースや会議室、アトリエ、学習室などの貸し室もあり、課題は山積している。

大改修の規模が大きくなればそれだけ費用は膨らむ。そして当然のことながら、そんなに費用をかけていいのか、という話になる。せっかく費用をかけるのなら、今まで以上に利用率を高めようという話も持ち上がり、文化や芸術に縁のない市民にも広く利用してもらおう、ということになる。費用は税金でまかなわれているから、利用しない者にとって不平等にならないように、という論理だ。本来、「平等」というのは、「機会」に対して使われるべき言葉と思うが、「結果」に対して使われることが多いのは嘆かわしいかぎりである。

ここまで来ると、次は自ずと指定管理者の話になってくる。つまり、この財団に運営を任せてよいのか、という意見だ。改修後はプロポーザル方式か、入札か。つまり民間に委ねてみようという話になりかねない。

平たく言えば、市が作った財団でだめなら、公募して良さそうな民間の管理者を選ぼうということであり、全国各地の自治体が文化財団を解散させてきた、ありふれたストーリーである。

しかし、この話を一般の企業にあてはめて考えると、どうだろう。子会社の業績が振るわない、となったら、通常、親会社は子会社を整理してから他に委託する、というのが一般的なのではないか。委託業者をならべてコンペを行う際に、子会社も参加させる、という話はあまり聞かない。

指定管理者制度は、あくまでも公共施設の運営、ソフトウェアの問題である。しかし、管理、運営とひとくちに言ってもその中身には、建物の管理、貸し館の管理運営に加えて文化事業を行うという大役がある。今後どのような事業展開をするのかという施設の運営方針が決まらなければ、改修もままならない。料理屋なら中華専門店なのかフランス料理の店なのか、出す料理によって店の佇まいは自ずと決まってくる。どんな料理も提供する大衆食堂なら、それ相応の店構えということだ。

大ホールの事業は、開館以来音楽ホールとしてクラシックを中心に入れて多くの公演を催してきたが、ここにきて、利用率を上げるために演劇や古典芸能が利用しやすいように改修すべきだと意見も出ている。

いずれにせよ、パルテノン多摩の場合は大規模改修という節目に、事業の見直しを迫られ、指定管理者を見直すべきか?という話にまで行きそうな気配になってきた、という話である。

財団にとって大切なことは、目前の問題解決だけに気をとられることなく、長期的な視点を持って事業を展開してゆくべく最善を尽くすことと、それを継続させうるだけの組織改革を行うことではないだろうか。

一般的な公共ホールにおける指定管理者制度の問題はさまざまな指摘があるが、最も根本的で重要な問題は唯ひとつである。それは、2012年の所謂「劇場法」施行以降、公共ホールの社会的位置づけや、役割が以前より明確になりつつある昨今、こと文化事業に限っては、「本来、国や自治体が担わなければならない文化行政を民間に委ねてよいのか」これに尽きる。



慶應在学中から音楽事務所へ そこそこ稼げてコンサートにも満足

ミリオンコンサート協会 代表取締役 小尾 旭

87歳、業界で61年

今日はお招きいただきありがとうございます。歳とともに目がかすむようになったし、何かと心配すれば心配なのですが、車の免許はまだ持っています。そういうえば明日(11月23日)は87歳の誕生日です。この業界で仕事を始めて61年になりました。

私が正式にこの仕事を始めたのは1955年です。新芸術家協会という会社を始めた西岡さんという方がいたんですが、彼は、東京に出てくる前、東北から北海道に掛けてクラシックの旅回りの興行師のようなことをやっていてうまくいっていたらしいんです。そんな方が、何にも知らない東京で「いざ音楽事務所を始める」ということで、バレリーナの町田絢子さんから「小尾君、音楽好きなら一緒にやってみたら？」なんて紹介されまして、2月に西岡さんの所に行きました。会った途端、「来週から来てくれ」なんて言われて、当時、私はまだ慶應の学生だったんですが、卒業前の3月にできたばかりの新芸術家協会に入社してしまいました。当時、大卒の会社員の初任給が7000円なんて言われてた時代に、「給料は8000円くれる」なんて言われましたので、「それはいいや！」なんて思っていました。ところが8000円もらえたのは行き始めた3月末だけで、4月末になっても5月末になってももらえなくなってしまい、結局、給料をもらえたのは始めの一ヶ月だけでした。

「夕鶴」公演を開催

新芸術家協会では、オーケストラの公演やオペラ「夕鶴」の公演も催しました。西岡さんはやる気はあるんですが、これがいい加減な人で、印刷物を作るにしても、私も文字の校正なんかはやったことがありませんでしたから、印刷が出来上がってみたらめちゃくちゃだった、なんてことも多かったです。ただ私は学生時代からN響の定期会員だったりして、あちらこちらへチケットを買って演奏会を聴きに行っていましたから、プレイガイドの事とか、演奏会の事は良く知っていました。ところが、西岡さんは北海道から出てきたばかりで、そんなことは何にも知らなかったんです。私が全部教えてあげたくらいで、それで興行を始めたんですから、無茶な人ですよね。

1年半ほど会社は続いたのですが、興行はみな失敗、お客様さんが入らないんです。一番ひどかったのは、後楽園球

場で東京フィルと東響の「東京2大オーケストラ合同公演」というのをやりましたが、客席はガラガラで大赤字でした。そんなことですから会社は自然につぶれてしまいました。私も半年分くらいの給料をもらえませんでした。高原さんも実際には新芸術家協会の始めから手伝ってはいたのですが、半年くらい後から社員となりましたので、高原さんにとっては1年だけで会社がつぶれてしまいました。

当時は、音楽事務所はまだあまりありませんでした。あったのは新演奏家協会、音楽芸術家協会くらいで、あとオーケストラの事務局が演奏会を催していました。吉田音楽事務所もありましたが、オペラだけをやっていました。まだ音楽界そのものが体を成していました。1950年代の頃です。その後の1961年、上野の東京文化会館の誕生で、音楽業界がガラリと変わったのですが。

ミリオンコンサート立上げ、初の年末「第九」

そして、1956年、一緒にいた高原さんとミリオンコンサート協会を立ち上げました。今でこそ年末に第九をやるのが当たり前になっていますが、年末に第九を始めたのは私です。最初の仕事として、同じ頃出来上がった日本フィルを使って日比谷公会堂で第九を催しました。その頃、興行として「第九をやろう」なんて人は誰もいませんでしたが、私は単に「第九を生で聴きたい」なんていう好みだけで「やってみよう」と思ったのです。これがお客様が良く入りました。会場の2660席に加えて立ち見で100人以上入れました。扉が閉まらないくらいです。当時は消防法なんかも無かったからできたんですね。そのおかげか、その後の日本フィルの演奏会をずっと手がけることができましたし、毎年第九の公演も催しました。だいぶ続けましたが、あまりに「第九」で稼げるものですから、逆に恥ずかしくなってやめてしまったくらいです。

当時日本フィルの事務局に草刈津三さんという方がおられまして、11年前に亡くなられたのですが、亡くなる直前に書かれた本^(注)の中に、ミリオンコンサート協会の事が少し書かれています。そこには「日本フィル成立と同時に開業し、日本フィルの定期会員や公演のためのサービスステーション的な役割をしていた。」と。また、「当時、N響の

注：参考資料：草刈津三「私のオーケストラ史」～回想と証言 刊：Duo Japan

メンバーの間に流行り言葉が生まれた。それは「一に桐朋二に日フィル、三、四が無くて五にN響」というのである。」とあって、日本フィルが優れた技術を持っていたオケであったことは確かです。1972年に一旦解散になるまでしばらくミリオンがマネジメントをしていました。当時の日本フィルにいた方々ももうみんな亡くなってしましました…。

ダークダックスでがっぽり

もう一つ、ミリオンコンサート協会に大きく寄与してくれたのは、ダークダックスです。慶應のワグネル合唱団で有名だ、という事で高原さんが見い出してってくれ、1958年から50年以上毎年公演を行いました。これはがっぽり儲けました(笑)。小島正雄さんという司会者とブルーコーツというバンドをいれて、ダークと合わせて当時ギャラは10万円くらいだったと思います。残念ながらダークダックスは3人亡くなり、今一人になってしまいました。

1972年、小林道夫先生と「ゴルドベルク」の連続演奏会を始めました。これは単に私がゴルドベルグが聴きたかったから、という理由です。また、「第九」のように恒例になればいいな、という思いもありました。それが今年で44年、まだずっと続いていますが、最近は「辞めるのはいつが良いか」などと話している内に、どんどんきっかけも年数も過ぎて行き、せっかくだからベートーヴェン生誕250周年でオリンピックもある2020年まで目標にしようか、なんて話しています。あと長く続いたのは岡村喬生の「冬の旅」。これも40年くらいやっています。最近は大晦日に「ベートーヴェンの弦楽四重奏連続演奏会」を主催しています。今度の年末で11年目です。これも行くところまでいきたい。こういう事をやっているマネージャーは他に日本でいないですね。これらも単に私の好みでやってきました。

文化庁長官賞に一言

数年前に文化庁から日本演奏連盟の推薦により文化庁長官表彰を頂いたのですが、表彰の理由としては「我が国の芸術文化の振興に多大な功績を残した」とあり、「マネージャーとして演奏家を縁の下から支えた」ということでした。音楽マネージャーとしては私が初めてでしたが、これがちょっと気に食わないんですね。「第九」や「ゴルドベルク」もダークダックスもですが、長年演奏会を企画して主催してきたことがメインですから、そこを表彰して欲しかったです。

会社の事務所ですが、森ビルの長男が私と慶應の同級生で、「今度ビルを建てる」というから、「じゃあ貸してよ」と頼んだら、「その屋上にプレハブ小屋を作ってやるからそこに入れ」と言ってくれたんで、それで森ビルに50年入ることができました。偶然隣があのリクルートの江副さんで毎日顔を合わせていましたが、当時はお互い何をやってい

るのかは全く知りませんでした。

森ビル社長の森稔さんは江副さんとも私とも友人だったので、当時、年中遊びに来ていて、碁盤を囲んだりしていましたが、その頃ちょうど新日本フィルができた頃(1970年代初め)でオケの事務局も10年間ウチにあって、練習場所の確保に苦労していたので、会う度に「練習場を作って」とか「コンサートホールを作って」なんてお願いしていました。そうしましたらあるとき森さんから、「サントリーが『ホールを作りたい』と言ってるから作ることにしたよ」となんて言われまして結果的にサントリーホールに結びつきました。何でも話の発端はこんなもので、「ホールが欲しい」という思いがこうしてつながっていく。「サントリーホールができたのも、私が森さんに言ったからじゃないか!」なんて思っています。

日比谷公会堂から、1961年東京文化会館、1986年のサントリーホールに続いてオチャードホールができていき、良いホールができる度にクラシック音楽界の事情が変わってきました。いわゆる『箱物主義』というのはよく批判されますが、私は箱物=ホールができることが先決だと今でも思っています。箱が無ければ演奏会はできません。企画は後からだって考えられます。実際ホールができる度にクラシックが盛んになってきたと思います。

いいと思った企画を続ける

私が歩んで来たこの60年は本当に幸せでした。考えてみると、本当にまたま多くの大物達が私の周りに集まってきたくてくださった。その皆様のお蔭で、大儲けとはいかなないまでもそこそこ稼げ、続けることができたことは幸せだと思います。フルートのニコレ、オーボエのホリガー、バイオリンの岩淵竜太郎、指揮者の大町陽一郎、そして山本直純さん。直純さんには本当に稼がせてもらいました。小林道夫先生の連続公演にしても、企画がずっと続いたことに本当に満足しています。そしてこれまでのどのコンサートにも大変満足しています。

私はこうしてなにか思想的にどうこうとか、若いとかベテランとかあまり考えないで、「この企画がいい」と思ったらとにかく「その企画で続けてみよう」と思い、その繰り返しでここまできました。単純に音楽に惹かれるようにしてこの仕事を続けてきました。運が良かったこと、これだけで不思議と何の苦勞もなくやってこられました。大勢の良い人達が周りにいてくれたこと、そして良い音楽に感謝の一言です。

2016年11月22日(火) 東京文化会館 小会議室1
音楽プロデューサー協会例会にて
記録: 小林信一(合唱音楽振興会事務局長)

寄稿



オーストリア 音楽の旅

父の会社を廃業し上京 クラシック界へ戻る転機に

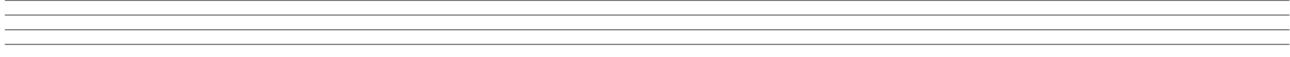
音楽プロデューサー協会代表幹事／株式会社ユーラシック代表取締役 村上雄一

ここはシューベルトの音楽をこよなく愛する人が集まるオーストリアの小村シュヴァルツェンベルク。緑豊かな大自然に囲まれたこの村で毎年「シューベルティアーデ」音楽祭が開催されている。ドイツの名バリトン歌手ヘルマン・プライが提唱し、1976年5月にオーストリアのホエネムスで始まった「シューベルティアーデ」にいつしか訪れてみたいと思っていた。この音楽祭は開催地の変遷を経て1995年からシュヴァルツェンベルクでも公演が行われるようになった。私が初めてこの地を訪れたのは2004年の夏ことでもちろん8月下旬から始まるシューベルティアーデ巡礼のためだった。その夏のヨーロッパ旅行のもうひとつの目的は、18年振りにザルツブルク音楽祭詣でをすることだった。そこで7月中旬に空路ミュンヘン入りしたあと、まず7月下旬から始まるザルツブルク音楽祭に向かった。旅の宿さがしはいつも苦労するが、ザルツブルクでは幸い郊外に手ごろなガストホーフが見つかり、後に知ったことだがそこはハンガリ一生まれの巨匠シャンドール・ヴェーグが長年逗留していた宿だった。

その年のザルツブルク音楽祭で聴いた公演で印象に残っているのは、オペラではまず過激な演出で物議を醸した「ばらの騎士」である。当初カルロス・クライバーが指揮するらしいと噂が立っていたが、残念ながらクライバーは公演直前の7月中旬に逝去し、その公演はセミヨン・ビシュコフが指揮をした。ヘンリー・パーセルの「アーサー王」は、指揮のアーノンクールを巻き込んだサイケデリックな演出で会場を沸かせ、ヴァレリー・ゲルギエフが指揮した「戦争と平和」とアイヴァー・ボルトンが指揮した「カ

フレーティとモンテッキ」にはいずれもソプラノのアンナ・ネトレプロが登場。当時私はネトレプロのことは何も知らず、ただただその歌唱力に驚かされ、また天鷲絨のような声の美しさに深い感銘を受けた。リサイタルで私に衝撃を与えたのは、何と言ってもモーツアルテウムで聴いたパトリツィア・コパチンスカヤのヴァイオリンである。もちろん名前も顔も知らないで2階最後列の舞台から一番遠い席で聴いたが、いまにも血が噴き出しそうな強烈な表現とコパチンスカヤのテンペラメントに釘づけにされ、爾来彼女を追いかけてヨーロッパだけで7回もの演奏を聴いている。一方でスターと言われている歌手のリサイタルも聴いたが、名前は伏せるがスターバリトンとは名ばかりでその歌唱は散々たるものであり、またウィーン・フィルを指揮したフランスの巨匠は、その演奏のあざとさだけが耳に残った。

ザルツブルクを後にして、一路列車でシュヴァルツェンベルクのシューベルティアーデ音楽祭を目指した。小村での3週間の滞在だったので宿さがしに骨を折ったが、バスで15分のとなり町に手ごろなペンションが見つかったのは幸運だった。そのペンションの近くでは牛の鳴き声が聞こえ、目前には牧草地が広がっていた。念願のシューベルティアーデでは、およそ30の公演を聴いた。辺り一面緑に囲まれたシューベルティアーデの会場アンゲリカ・カウフマン・ザールは、外部内部とも総木造りで、音が柔らかくそれでいて芯のある響きのする約600席のホールで、室内樂や歌曲を楽しむのに相応しい会場だった。また出演者は若手から中堅、ベテランとバランスの取れた人選で、若手ではソプラノのディアナ・ダムラウやユリアーネ・バンゼ、中堅ではメゾ・ソプラノのアンゲリカ・キルヒシュラガー、ハーゲン弦楽四重奏団やフォルテ・ピアノのアンドレアス・シュタイヤー、またベテランではソプラノのデイム・フェリシティ・ロットやテノールのペーター・シュ



ライヤー、ボザール・トリオまで実力のある演奏家がほとんどで、それぞれの演奏が心に残る感動的なものだった。ここシューベルティアーデ強く感じたのは、心の底から音楽を愛してやまない人たちが、ヨーロッパのみならず世界中からこの音楽祭に集まっているということだった。ここに来た音楽愛好家の多くは、この地に10日間くらい滞在して連日演奏会を楽しんでいる。そのうちに会場で何人かの人たちと顔見知りになり、自然に音楽談議が始まるのは楽しいひとときでもある。その中にシュヴァルツコップ通がいて、驚いたことにベルリン生まれの彼は、シュヴァルツコップがいつどこで何を歌ったか、どんな役でオペラに出演したかほとんど記憶しているらしい。シューベルティアーデではリートの演奏会が数多く行われ、愛好家の話は好みの歌手の話題で持ちきりになる。たとえばそのときに出演していたテノールでは、アン・ボストリッジ派とクリストフ・プレガルディエン派に分かれ、バリストンではトーマス・クヴァストホフ派とマティアス・ゲルネ派にそれぞれ分かれて話が盛り上がりとても面白かった。私はプレガルディエン派でありクヴァストホフ派であったが、知り合いになった英国人のドイツ語教師の女性は紛れもなくボストリッジ派だった。彼女がほとんどプレガルディエンを評価していないかったので、プレガルディエンの名誉のために、プレガルディエンが歌う「美しき水車屋の娘」の演奏会のチケットを彼女にプレゼントした。すると終演後、まもなく彼女は目にうっすらと感動の涙を浮かべ

ながら私に近づいてきて、今まで聴いた「美しき水車屋の娘」のなかで最高の演奏だったと語ってくれた。またドイツ語教師でもあった彼女は、これほどディクションの美しい歌唱は聴いたことがないと絶賛していた。私は懐が痛かったが、プレガルディエンの素晴らしさを知ってもらって嬉しい気持ちになった。

2004年は私にとって転機の年でもあった。1985年K音楽事務所を退職し、その後郷里にある父が設立した会社で2004年2月まで18年間働いた。父は2000年に他界していたので、2004年に私が会社を廃業することを決め、今後の仕事について何のあてもないまま、また音楽にかかわる仕事をするんだと漠然と思い浮かべていた。そのとき私は49歳になろうとしていた。その年はザルツブルク音楽祭、シューベルティアーデだけでなくヨーロッパで音楽三昧をして過ごした。なぜなら、シューベルティアーデの後も引き続きヨーロッパに滞在したからである。チューリッヒ、パリ、アムステルダム、ベルリンに目当ての音楽会を見つけては旅し、そして10月からは3ヶ月間ウィーンに住んで、気がつけば半年で120回ほどの演奏会を聴いていた。そしてたまたま知人から借りたウィーンのアパートメントは、偶然にもシューベルトの生家まで歩いて数十メートルのところにあった。もちろんシューベルトの生家にもちょっとだけ足を運んだりもした。これから待ち受ける将来の仕事の不安も忘れて。



Schwarzenberg



平成 28 年 11 月 22 日(火) 東京文化会館小会議室 1

小尾旭さんのお話を聞く

平成 28 年 音楽プロデューサー協会例会等活動一覧

- 1月 21 日(木) 17:30 木村三田店 新年名刺交換会
- 2月 9 日(火) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 トラブルやクレームの対処法、公文協セミナーなど
- 3月 17 日(木) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 2 マイナンバー制度のこと
- 4月 20 日(水) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 今後の予定について、外国人演奏家の消費税取扱いについて
- 5月 19 日(木) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 親睦行事について
- 6月 16 日(木) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 2 JASRAC
- 7月 13 日(水)～14 日(木) 親睦旅行 グリーンプラザホテル箱根
- 7月 27 日(水) 14:00 総会
- 9月 20 日(木) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 規約、慶弔規定、HP、会報などの件
- 10月 20 日(木) 14:00-17:00 東京文化会館中会議室 2 新年会他、今後の予定について
- 11月 22 日(火) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 小尾旭さんのお話を聞く
- 12月 7 日(水) 14:00-17:00 東京文化会館小会議室 1 指定管理者制度のはなし

Classic Vicus 第 12 号 2017 年 1 月 音楽プロデューサー協会発行 編集／志村嘉一郎 デザイン／梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

在原 勝 (株) 東京プロムジカ 代表取締役
 上野喜浩 すみだトリフォニーホール プロデューサー
 内田一成 (株) フューチャーデザイン 代表取締役
 梅津知美 (公財) 多摩市文化振興財團 音楽プロデューサー
 江藤昌子 こぶしらぶ主宰 プロデューサー
 小川光彦 アーツコム東京 (株) 代表取締役
 兼岩好江 オフィス アルシュ 代表
 横松大剛 ロングランプランニング (株)
 (カンフェティ) 代表取締役
 黒川浩明 (有) 大阪アーティスト協会 代表取締役
 向後由美 (株) せきいい社 「サラサーテ」 編集部
 小林信一 一般財團法人合唱音樂振興会 事務局長
 東京混声合唱団 常務理事
 斎藤 茂 OTTAVA (株) 取締役 ゼネラルマネージャー
 佐々木仔利子 (特) 日本室内樂アカデミー 理事長
 志村嘉一郎 ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人
 白神克敏 (株) ヴォイシング 代表取締役
 高原加代子 (株) ミリオンコンサート協会
 寺田有佑 (株) 日本アーティスト 取締役会長
 戸部山起子 (有) エクレジアアーツ 代表取締役
 中根俊士 (株) 東京アーティスツ 代表取締役
 中村由美子 リモージュコンサート (株) 代表取締役
 萩生哲郎 ナクソス・ジャパン (株) デジタル事業部

橋本伸一郎 (株) いちべる 代表取締役
 原 浩之 ハクジュホール ((株) 自寿生科学研究所) 支配人
 平井 满 横濱樂友会／鶴沼室内樂愛好会 代表
 松崎三恵子 (株) シド音樂企画 代表取締役
 松本京子 (有) おふいすべが 取締役
 丸田 朗 (有) マルタミュージックサービス 代表取締役
 村上雄一 (株) ユーラシック 代表取締役
 村田 亨 (株) テレビマンユニオン
 エグゼクティヴプロデューサー
 藤田益資 インターネット「クラシック・ニュース」プロデューサー
 吉井實行 公益社團法人日本オーケストラ連盟 専務理事

代表幹事 村上雄一
 幹 事 梅津知美 横松大剛 中根俊士
 丸田 朗 藤田益資

監 査 平井 满
 事務局長 丸田 朗

Ongaku
Producer
Kyokai

2017 年 1 月現在